

普及センターだより 260号

堆肥の「地産地消」を目指して 家畜ふん堆肥の散布実演会

6月5日に松尾町広根のほ場においてネギ農家、畜産農家や関係機関等40名を集めて、松尾町内で生産された家畜ふん堆肥の散布実演会を行いました。

これは、「エコファーマー」を目指すJA第三集出荷センター管内秋冬ネギ生産者を対象に、地元畜産農家が作った堆肥の品質、散布方法を実際に見てもらい、耕畜連携による土づくりを実証することをねらいに開催したものです。

前日に台風が接近し、ほ場の状態が心配されましたが、JA大平支所青年部のはたらきで約30aのほ場は良好な状態に保たれていました。

畜産農家所有のダンプ搭載型マニュアルスプレッダー、ブロードキャスターの散布実演が行われ、併せて堆肥の材料・発酵期間などの検討を行いました。

普及センターからは、家畜ふん堆肥の種類による特徴の違いや、「ちばエコ農産物」に向けたネギの栽培試験について説明がありました。

参加したネギ農家の中には、その場で堆肥散布を畜産農家に依頼する人もありました。

このほ場では6月12日にネギの移植機の実演を行い、JA太平支所青年部の管理で秋冬ネギの栽培試験を実施しています。堆肥施用による秋冬ネギの栽培試験については、9月頃に中間検討を予定しています。



普及の進む マルハナバチの利用にあたって

管内の施設ナスやトマト栽培では交配作業の省力化のためにマルハナバチの利用が普及してきています。

現地では成功、失敗の事例が様々ありますが、失敗の原因としては農薬の散布に起因するケースが多く、これを回避するためには散布農薬の選定に細心の注意を払うしかありません。また、散布農薬が制限されますので、施設内へ害虫を侵入させないように開口部にネットを張るなどの措置は必須です。

次に、巣箱の温度管理に問題がある場合があります。特に高温による失敗が多いので、巣箱内が 30℃ 以下で管理できるような温度の上がりにくい場所に設置し、日除け対策を確実にとり、場合によっては冷却材を使用するなどの措置を講じることが重要です。

最後に不良花の発生です。マルハナバチは交配のために花粉を運ぶ役割を担っているにすぎませんので、花粉が出ない、あるいは出ても稔性が低い不良花では結実しません。したがって、マルハナバチの利用にあたっては樹勢等を好適な状態に保ち、良好な花を咲かせることに心がける必要があります。

このため、花弁が強く反り返ったり逆に花弁の開きが悪いなどの奇形花が多発するような強樹勢は問題となります。花によく光線があたり、素直に花弁が展開するおとなしい樹勢管理が必要です。

さらに、花粉の稔性確保のためには施設の温度管理への注意が必要です。高温側では 30℃ 以上の高温、低温側ではトマトで 10℃ 以下、ナスで 13℃ 以下の低温への遭遇持続時間が花粉の稔性等に影響すると考えられます。特に曇雨天等の弱日照下でその傾向は助長されるようです。また、低温は冬期の場合夜間だけでなく、曇雨天
日の日中も注意が必要です。



ナス花粉の発芽

暑さを防ぐ農作業小物

夏場の炎天下での草取りをはじめ、定植、間引きなどの農作業は、作業者の体に大きな負担を与え、疲れの原因になっています。少しでも暑さを軽減して楽に作業ができるような工夫を紹介します。

その1 涼かちゃん帽子

帽子をかぶるとともに首の後ろを保護し、直射日光を当てないようにします。前半分が麦わら、後ろ部分が遮光資材ダイオミラーを利用した帽子が市販されています。炎天下での作業を和らげることができます。



利用した方の感想

利用する前は、直射日光が背中に当たり陽にやける・背中がジリジリやけるように暑い・疲れて、作業の能率が上がらないなど問題がありましたが、利用すると、背中の中のジリジリした感じがなくなった、涼しくなった、ほてりがなくなったとの声を聞きます。

その2 インナー手袋

ゴム手袋をはめただけでムレてしまいますが、中に専用の手袋（ポリエステル素材）をすることで、吸湿がよく、乾きやすいのでムレ防止に効果があります。フィット感に優れているので作業性もよいです。



J A や農業資材店で取り扱っていますので、帽子や手袋など小物を上手に利用して暑さ対策をすすめてみましょう。

イチジクを知っていますか？

～小面積・グループ化で儲かるイチジク栽培～

イチジクは、独特の風味と食味で、日本人になじみの深い果樹です。また近年の健康食品ブームで、低カロリー・高ミネラル果実であるイチジクが注目されています。

普及センターでは、イチジクを家庭果樹ではなく、遊休農地や労力の活用として、農業経営に取り入れることを目標にしてシリーズで紹介します。

イチジクは、野菜感覚で・・・

果樹を導入すると考えると一歩引いてしまう方がいますが、イチジクは管理作業や収穫等、野菜感覚で栽培できる果樹です。

日本で栽培されているイチジクの品種は、単位結果性(交配がいらぬ)で、結実の確保が容易です。また病害虫の発生も比較的少なく、栽培のポイントを習得するだけで、誰でも期待どおりの収量を上げることができます。栽培技術は、特に高度な技術を必要としません。また作業も軽作業が多く、女性や高齢者に適した果樹といえます。

経営規模は、収穫期の労力

イチジクは、「日毎に一熟す」といわれるように、収穫は、毎日または隔日に長期にわたっての収穫になります。榊井ドーフィンの秋果は、8月中旬～10月いっぱい収穫となり、特に8・9月の労力をどれだけ確保できるかで、経営面積が決定されます(夫婦二人で20～30a)。

少ない投資で大きく儲ける

ナシなどと異なり、イチジクは、開園費がすくなく、苗も挿し木で容易に得ることができます。結果樹になるのも早く、一文字整枝では、植え付け2年目から収穫となり、4年目ではほぼ成園並の3トンの収穫が得られます。消費は、健康食品として順調に伸びており、輸送技術の向上で完熟したおいしい果実がテーブルフルーツとして食卓に並ぶようになりつつあります。

さあ、あなたもイチジクを栽培してみませんか？



星に願いを！ 私らしく輝くために

成東町では、平成 13 年度に農業・農村男女共同参画推進協議会（15 名）が発足し、渡辺和代会長のもと様々な企画を開催し、地域を巻き込んだ魅力ある農業・農村社会の実現をめざしています。

去る 7 月 7 日七夕の夜に、東金市の「ホテルエストーレ」において、女性のための女性による女性だけの交流会『七夕の集い』が開催されました。これは、女性農業者が自分を見つめ直し、その能力を大いに発揮し夢に向かって前進することをねらいに、推進協議会の女性メンバー 8 名が中心になり企画・運営をしたものです。管内の女性農業者 54 名が集い、「自分をどう呼ばれたいか」をテーマにした寸劇で幕があがりました。笑いを誘いながらも、農村のもつ独特な風習、家・女性の立場などを参加者に問いかけました。

その後、「私の役割」と題して山武町で観葉植物経営をしている古内恵美子さんから事例発表がありました。女性も自立して自分の役割をこなすことが自信とやりがいにつながるという力強いメッセージもあり、参加者から共感の声があがりました。最後に短冊にそれぞれの願い事を記して、ロマンティックな集いは幕を閉じました。

これを機に、参加した女性農業者達が明るく前向きに情報と知恵を出し合い、夢の実現に向かって大きな一歩を踏み出してくれることを願っています。

フレッシュニューファーマー 行木 達哉さん・彩子さん

行木牧場の達哉さんは、朝夕が一番の繁忙タイム。昼間、普及員がこのところ訪問すると、牛舎の修理や敷き料の搬入、そして本業？のジムカーナに出場する愛車の整備をしています(くわしくは<http://www.geocities.co.jp/MotorCity-Race/5260/sub3.html>まで)。

2年前、勤めていた会社を辞め、酪農を始めたのは、お父さんが交通事故で怪我をしたのがきっかけでした。「もともと継ぐ気ではいたけれど、こんなに早くなるとは思いませんでした」そして、今までの体にきつい生産一辺倒の経営から、心にゆとりを持ち家族全員が生活を楽しめる経営へと方針を転換しました。

フリーストール方式による省力化、給餌飼料の見直しによる作業の簡便化や、経営の多角化としてアイスクリームの生産など、一人一人が役割を持ち、家族全員で経営を支えるようになりました。

この3月には、同じ学校に在籍していた彩子さんと結婚。パワーアップした愛車の微調整も一段落し、次のレースは優勝も射程圏内。趣味に仕事に充実した日々を二人して送っています。

